



「住民とともにつくる地域医療」を通じて地域の病院を立て直した鎌田先生。経済問題にも一家言があり、独自の視点からさまざまな提言を行っている。高校の同窓生でもある須田審議委員との対談の中から、「自分たちが幸せを感じられる温かな国」づくりにつながる、説得力のある処方箋が浮き彫りになってきた。

ウエットな資本主義を基盤に 温かい国づくりを進めよう

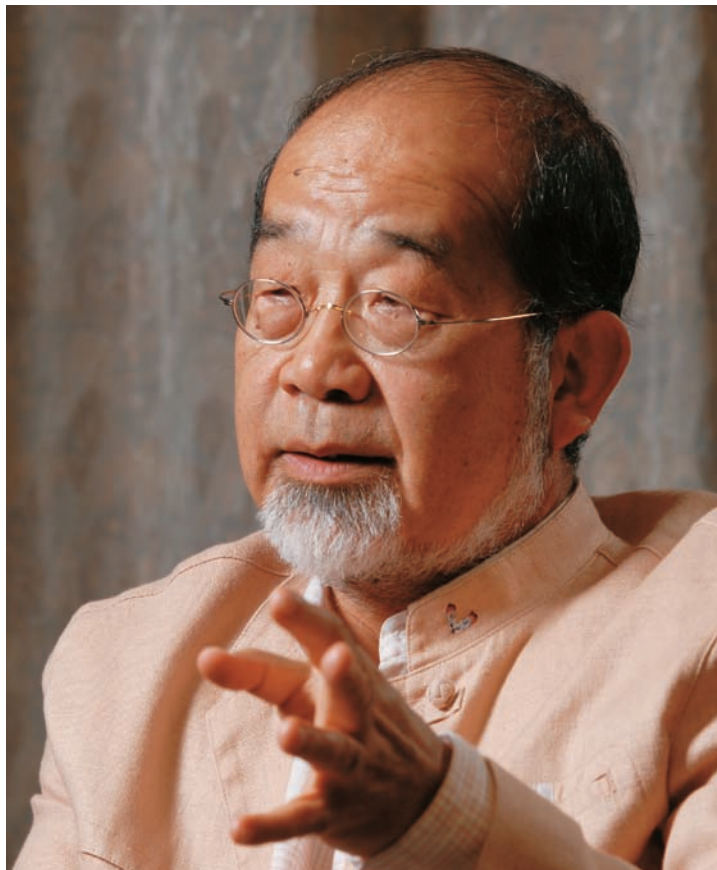


日本銀行政策委員会審議委員

須田美矢子

Miyako Suda

〔すだ・みやこ〕1948年山口県生まれ。1971年東京大学教養学部卒。1979年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。1982年専修大学経済学部助教授。1988年専修大学経済学部教授。1990年学習院大学経済学部教授。2001年日本銀行政策委員会審議委員。2006年日本銀行政策委員会審議委員再任。



諏訪中央病院名誉院長・作家

鎌田 實

Minoru Kamata

〔かまた・みのる〕1948年東京都生まれ。1974年東京医科歯科大学医学部卒業後、長野県の諏訪中央病院に勤務。1988年院長就任、2005年名誉院長。2008年岐阜経済大学客員教授。2000年にベラルーシ共和国大統領よりフランチェスカ・スコリヌイ勲章を受章。『がんばらない』『あきらめない』『なぜださない』『へこたれない』など著書多数。

八五歳のおばあちゃんも 老後が不安？

須田 鎌田さんの本やご発言から、医療の仕事は日銀の仕事と同じだなと思ったことがあります。

それは、「お金を安心して使えるようにする仕事をしている」ということです。八五歳のおばあちゃんのエピソードが印象的でした。

鎌田 お話の八五歳のおばあちゃんは、かなりの貯金があるのですが、最近ほとんど使っていないと言っています。その理由が、「老後が心配だから」。老後そのもののなに。ドライなアメリカ流の資本主義もいけれど、日本はもつとウェットな血の通った資本主義を目指したほうがいい。三五年前に四億円の累積赤字があった諏訪中央病院を立て直していく中で、質の高い温かい医療を持続するためには経済や経営が大切だと実感しました。

須田 日銀は、世の中にお金がいちちゃんと行き渡るように、お金の

価値が維持されるように努めています。このおばあちゃんの場合とはやや意味が違いますが、お金を安心して使えるということにつながっているわけです。

鎌田 日本には一四〇〇から一五〇〇兆円の金融資産があるので、その二割でも動き出せば世の中は元気になるのではないかと考えています。このおばあちゃんに象徴されるように、みんな老後が心配なのです。そこで、上半身は貿易立国として競争力を維持できるよう厳しく鍛える一方で、子育てや教育、医療や介護といった下半身には温かい血を通わせる。そんな資本主義にしていきたいということです。

須田 私もウェットな資本主義についてはそのとおりだと思います。日本は少子高齢化時代を迎えており、金融政策を運営していくうえで、今後の期待成長率が気になります。内需が拡大しない理由として、老後の不安という部分もかなりありそうです。国がどこまで老後の面倒を

みてくれて、自分でどれだけ手当てしておけばよいのか分からないところに問題があります。

鎌田 不安心理なんですよ。ね。

医療面でいうと、日本の総医療費はGDPの八%程度です。アメリカの一六%とは言いませんが、ヨーロッパ先進国並みの一〇%ぐらいになれば、おそらく世界で最も充実した医療になる。大事なのは、制度を少しだけ見直して、これからはあったかい国をつくると国民を安心させるメッセージを出すことです。日本は全体としてみれば結構いい国だと思うんです。今こそあったかな物語を語るべきです。将来の安心感が高まれば、お金も回転してくるのではないかな。

国をよくするには メッセージ力強化が必要だ

鎌田 巨大な財政赤字の影響で、医療分野の予算はブレイキが踏まれ続けていて、日本の医療は

壊滅的な状況に陥っています。今回の経済危機を乗り越えるために、どうせお金を使うなら、国民が安心できるように使ってもらいたい。そして国民のためにも、景気の波がこんなに大きくならないようにしなければなりませんね。

須田 金融政策はまさに、大きな波のある成長ではなく、安定的に成長できるような経済にしていこうためのものです。そのために頑張っています。

鎌田 日銀の打つ手には、どんなものがあるのですか。

須田 普通は政策金利と呼ばれる金利を動かして、経済に影響を与えようとしています。その際には、景気は「気」と言われるように、人々の期待に働き掛けていくという面もあります。

鎌田 みんながそう思えるようにすることが重要なんです。ね。同じように、この国をよくしていくためには、国からのメッセージ力を強めていかなければなりませんよ。

地域を健康にするのが 病院の役割

今年の五月に『へこたれない』という本を上梓しました。その中で、「おたおたしない」「恐れない」「悩まない」「へこたれない」「欲張らない」の五つを挙げました。何かを恐れすぎではないけい、ピンチはチャンスだといいうメッセージです。

また、ブログの中では「株を買おう」と呼び掛けています。社会全体のことを考えて事業を行っているような企業があれば、その応援団のつもりで株を持つことが大事だと考えています。この不景気な時期に、家を建てたり、クルマを買ったり、株を買ったりすることを、変なことではなく、偉いぞと思うような社会の空気をつくりだすことが必要です。萎縮した空気に染まらずに明るい空気を自分たちでつくる必要がある。こうしてみんなが少しでも動き出せば、日本は世界のどこよりも早く不況から脱出できるのではないかと思います。

須田 『がんばらない』という本を拝見すると、諏訪中央病院の立て直しでは、「地域とともに」「みんなでやる」ことがポイント

となったように感じました。特殊要因もあったと思いますが、この成功体験は、日本の医療をよくするために、どう参考にできるのでしょうか。

鎌田 地域とつながったことはすごく大きかったと思います。地域に行って初めて地域の課題が見えてきました。脳卒中が多く、医療費が高い、不健康な地域だったのです。これでは病院をよくするだけでは問題は解決しません。そこでまず、地域から健康にしようと、年間に約八〇回は地域に向いて「健康づくり運動」を行いました。実は昨日も若い研修医など約三〇人と「鎌田塾」を開きました。九〇歳のおばあちゃんに来てもらい、昔、僕がそのおばあちゃん

の協力を得ながら地域とどうやってつながったか、つまり「温かな医療」をどう実践したかということを、若い医師たちに直接見てもらいました。

須田 「温かな医療」がキーワードですね。

鎌田 温かな医療とは、温かなシステムが病院と地域に張り巡らされていること、患者さんを放り出さない医療のことです。救急医療を確立するだけでなく、障害が残った人のケアや末期がん患者のホスピス、自宅療養に対応する二四時間往診体制などのネットワークを構築しました。その上で、病で倒れないための「健康づくり運動」をしたのです。

地域の人が医師を育てる ——そんな地域力を育む

須田 鎌田先生は杉並区立和田中学校のご出身ですが、民間人出身の藤原前校長先生も学校を変えました。共通しているのは地域力をうまく育てて利用して

いることだと思います。

鎌田 昨日の九〇歳のおばあちゃんのように、地域の人々が病院に協力してくれた。また、自分たちにとって大事な人材である医師を地域で育てていくというのも地域力の一つだと思います。これを繰り返していけば、若い医師も地域に魅力を感じるようになります。コミュニケーションの力をもっと信じることでですね。

須田 今の若い人たちの中には、人と人との交わり方が苦手な人が多いようです。人間力は、人と人との対話を通じて高まっていくものであり、コミュニケーションや医療のあり方でも人とのつながりが重要ですが、どうもそこが弱くなっているようです。

鎌田 地域が崩壊しつつあり、地域力が低下しています。僕たちが小さかったころは、家庭の教育力も学校の教育力もしっかりしていたが、何と言っても、地域の教育力がガッチリしていました。しかし、今はこの三つ



の教育力が共に低下してきました。国も真剣に考えていく必要があると思います。

須田 国ができることは何でしょうか。

鎌田 僕は、大学に行けなかったら寿司職人になろうと思っていました。偶然、大学に受かって人生が変わったのです（笑）。かつてこの国には教育力があつたのです。僕は最近、一人の青

年が大学に行く学費を応援しました。ただ、こうした応援も一人一人の人間の力では限度があります。国が何らかの形で応援できるような仕組みを作った方がいいと思うのです。公的教育費はGDP比三・四％。先進国の中でひどく低い。教育にお金をかけて温かな国をつくつたらいい。

温かい物語を語れば 国民は動いてくれる

須田 私も地域につながりを持ちたいと考えています。特に、われわれ団塊の世代は、もっとコミュニティをよくしていくように頑張らなければなりませんね。

鎌田 今日、僕がつくった「がんばらないレーベル」というレコード会社の三枚目のCDを持つてきました。聞いてください。今年のバレンタインデーには、イラクの白血病の子どもたちが描いた絵をラベルにしたチョコレートを売りました。利益はす

べてイラクの病気の子どもたちの薬代。合わせると五千万円分ぐらいになりました。日本人は心が温かいですから、温かい物語を語ると国民は動いてくれます。同じように、経済でも何か温かい物語をつくってはどうかでしょうか。例えば、五年は苦しいけどみんな我慢すれば、日本はこんないい国になるんだといった物語がちゃんと描ければ、将来をそんなに恐れることもなくなると思います。

須田 日本人は不況慣れしていると言われますが、昨年の秋以降の金融や経済の混乱がこれまでに経験したことのない大きさだったので、先が読めない不安を特に強く感じているようです。ところが、最近の調査をみると、

例えば街角景気が思いのほか良くなっていました。人間は自分の想像と違ったポジティブサブライズが起きると、「思ったよりいいじゃないか」と気分もがらっと変わりうるといふことです。

鎌田 私は長い間同じクルマに

乗っていました。今度ハイブリッドカーを買うことにしました。繰り返しになりますが、今は買える人が買う、いいクルマが出たら買う——それがこの国の経済を動かすのではないのでしょうか。

須田 経済成長の持続という面でも、購買意欲を高める方向にマインドを変えていくことは重要ですね。そのためには、医療や介護、年金などの面で生活の安心感を高める必要があります。

鎌田 今回、政府が福祉関係の予算をわずかに増やしたことで、福祉の世界は急に元気づきました。子育て関連にも予算が付いています。マインドが良くなれば、少子化に多少は歯止めが掛かるような気がします。

須田 家計にとつては、教育にお金が掛かりすぎることも子育てのネックになっています。こうした課題解決を含めて、温かい医療、温かい経済、温かい国づくりが必要ですね。本日はありがとうございました。